連携で作る子ども食堂
―ほんわか食堂のつながりに着目して―

岸田　彩里

論文要旨

本稿は、コロナ禍によって普段の活動が一変してしまったにも関わらず、なぜ運営を再開・継続している子ども食堂が存在しているのかを解明しようとするものである。ある講義で、「ほんわか食堂」運営者、松土敏子さんは「子ども食堂は１人では（運営）できない」と話されていた。この言葉を手がかりに、企業や他の団体などとのつながりの重要性に着目し、コロナ禍における活動形態の変化と、コロナ禍における子ども食堂の運営の継続に関する要因を考察するのが本稿の目的である。

三密を避けるコロナ禍のなか、子ども食堂の継続要因を解明するために調査したいと思ったのが、名古屋市南区（コロナ禍は名古屋市港区）を主な拠点に活動しているほんわか食堂であった。5周年をまもなく迎えるほんわか食堂を調査することで質の高い調査ができるのではないか、そして筆者が今までに参加してきた子ども食堂の中でほんわか食堂への参加が最も多いため今までの経験も含めまとめることができるのではないかと考えたためだ。そういった考えから実際にほんわか食堂の代表者である松土さんに計２回インタビューを行い、ほんわか食堂開始時からコロナ禍における活動形態の変化などを知ることができた。本稿ではインタビューで感じた松土さんの思いや考えを取り入れつつ、実際にほんわか食堂がどういった歩みで現在まで活動を継続することができたのかをまとめ、それを基に子ども食堂の継続要因を考察していく。

第１章ではコロナウイルス流行により貧困世帯の存在がより浮き彫りとなった現状から、コロナ禍における子ども食堂の重要性について述べた。コロナウイルスは社会情勢に大きな影響を与えたが、2020年度社会調査実習でそのような厳しい状況下でも活動を再開・継続している子ども食堂が存在していることが明らかとなった。

第２章・第３章では今まで通りの活動が難しいように思えるコロナ禍で、どのように活動を再開・継続することができたのかという疑問を解明すべく、様々な視点から今年５周年を迎えるほんわか食堂の活動についてまとめた。

第２章では、ほんわか食堂のコロナウイルス流行前後の活動やコロナ禍における活動形態の変化をみた。松土さんやスタッフの方々の「できることをしてあげたい」「美味しいご飯を作ってあげたい」という思いからパントリーや食事・お弁当提供を始めたことをまとめた。ここから、ほんわか食堂の温かく優しい気持ちの存在が現在の活動を継続させていると実感した。

第３章では、企業や団体等といったつながりの部分に焦点をあてた。具体的には、2020年度社会調査実習から明らかとなった愛知県内にある子ども食堂の人（団体）の連携数や連携内容をまとめた後、松土さんへのインタビューで明らかとなったほんわか食堂の人（団体）とのつながりを詳しくみた。愛知県内にある子ども食堂全体としては、地域住民個人（地域ボランティア）、社協、フードバンクの順に連携数が多いという結果となった。ほんわか食堂でも同じような結果となったものの、企業と関わりを持つためにはあいち子ども食堂ネッ

トワークなどの団体との関わりが重要であり、団体を通し様々な企業と出会うことで質の高いパントリーができることが明らかとなった。

加えて、第３章では参加者や企業との関わりを継続させる方法について考察した。日頃の参加から、ほんわか食堂のパントリーは事前予約制で予約の時間を少しずらしており、地域の人と顔を見合わしてしまう心配も少ないことから、貧困であることを他人に知られたくないという日本の文化に合わせた活動を行っていることを感じていた。このことから、こういった活動方法は参加者にとって参加しやすいものとなり、継続的に参加してもらえるのではないかと考察した。企業については、企業と関わるための根本となるあいち子ども食堂ネットワークなどの団体に焦点を当て考察した。団体に対し自分達ができる協力を率先して行うという松土さんの発言から、協力をし続けることで団体からの信頼を得ることができ、団体に関連した企業との関わりも継続したものになるのではないかと考えた。

第４章では、第２章と第３章を基に本稿の目的である子ども食堂の継続要因を考察した。第２章からは、松土さんをはじめとしたスタッフの方々の社会情勢や参加者の気持ちを考慮しながら活動形態を変化させている姿から、子ども食堂の継続要因の一つとして、「自分達ではなく地域の人々を第一優先に行動する活動」だと定義した。第３章からは、筆者の経験から感じたほんわか食堂の居心地の良い雰囲気とインタビューで明らかになった様々な団体の協力を継続して行っていることから、「子ども食堂運営者達が作り上げる居心地の良い雰囲気と運営者の真面目な姿勢の存在」と定義した。子ども食堂を１人で作り上げることは非常に難しいが、ほんわか食堂の今までの活動や思いを振り返ったことで子ども食堂を継続して運営していくためには「参加したい」「助けになりたい」と思ってもらえるような子ども食堂を作り上げることが最も重要であると気づかされた。

終章ではこれからの子ども食堂と称し、今後の子ども食堂における課題とその解決策について考察した。具体的には、現在コロナウイルスが収束に向かっている現状から、「今後いかに子ども食堂とパントリーの活動を両立させていくか」という課題を提示し、その解決策として近隣の子ども食堂と連携するなど、それぞれの運営者の負担にならないような工夫をしていくことを挙げた。

序章　子ども食堂は連携プレー

「子ども食堂は１人だけで作ることはできません。支援してくれる人やボランティアの存在があってはじめて子ども食堂を作ることができるんです。」

これはある講義の中での、ほんわか食堂松土さんの言葉である。筆者は約２年半様々な子ども食堂に参加させて頂いているが、たしかにこの言葉のように多くの人の協力が１つの子ども食堂を作っていると感じる。こういった部分から松土さんのこの言葉が筆者の中で非常に印象に残り、改めて子ども食堂とはどういったものなのか、また何を必要とするのかを考えてみた。

言うまでもないが、子ども食堂と言う名の通り、子どもと食の存在は重要だ。だが、子ども食堂を開催するにあたってはじめに必要となるのは、場所の確保やボランティアなどの人材の確保、そして寄付してくれる農家や個人の方などといった様々な「人」の存在だ。このように考えると１つの子ども食堂を作るために最も重要な材料は子どもや食の存在以上に人とのつながりではないかと考えた。人とつながり、はじめて子ども食堂という居場所を作り

上げることができるのである。

だが、コロナ禍で状況が一変した。愛知県内の子ども食堂を対象にした社会調査実習によると、調査をした81カ所のうちほとんどの子ども食堂がコロナウイルス感染防止対策として活動を中止した（短期間も含める）。人が集まり、共に食事を楽しむ存在であった子ども食堂がコロナ禍で裏目に出てしまったのである。そのような厳しい状況の中でも活動形態を変えるなどして活動を再開した子ども食堂が何カ所か存在する。ここでは筆者が何度か参加させて頂いている名古屋市のほんわか食堂に焦点を当て、コロナ禍でもなぜ子ども食堂を継続して運営することができたのかという問いに対し、人とのつながりを大切にし、状況に応じて活動形態を変化させていくことで、厳しい状況下でも継続した運営ができるという仮説を立て、調査していく。

第1章ではコロナ禍の子ども食堂の役割についてまとめたあと、2020年度社会調査実習から愛知県内の子ども食堂の再開の有無を調査した。第2章ではコロナウイルス流行前後のほんわか食堂を紹介し、コロナ禍においてパントリーを始めた経緯や活動形態の細かな変化についてまとめ、それらの重要性を述べた。第3章では企業や団体等とのつながりに焦点を当て、社会調査実習での結果を基に子ども食堂はどのようなつながりを求めているのか、またどのようなつながりを持っているのかを調査した。その結果が間違いのないものなのかを調査すべく、筆者が継続的に参加しているほんわか食堂に焦点を当て、ほんわか食堂はどのようなつながりを持って活動をしているのか、またそのつながりはどのようにして生まれたのかをまとめた。ほんわか食堂の今までの歩みを基に、第4章では本稿の目的である子ども食堂の継続要因について考察し、終章で本稿のまとめと筆者の今後の子ども食堂の課題とその解決策について述べていく。

第1章　コロナ禍の子ども食堂

第1節　子ども食堂の現状と役割

子ども食堂とは、子どもが1人でも行ける無料または低額の食堂のことであり、子どもへの食事提供から孤食の解消や食育、さらには地域交流の場など様々な役割を果たしている。コロナウイルス流行前の多くの子ども食堂は、地域の子ども達やその保護者、そして高齢者といった多世代交流の場としても機能しており、地域の人々にとってかけがえない一つの居場所となっていた。だが突然のコロナウイルス流行で、多くの子ども食堂が休止に追い込まれてしまうという非常事態に陥った。コロナウイルスは社会に混乱を招いただけでなく、地域の居場所をも突然なくしてしまったのである。

言うまでもないが、コロナウイルスは日常生活を一変させた。2020年5月の朝日新聞の記事によると、学校休校や在宅勤務などで自宅での時間が今まで以上に増えたことがきっかけで家族に対して少しのことで腹が立ち、関係が悪化してしまうケースも多くなったという[1)]。この記事の中にはコロナ禍における経済的困窮が関係悪化の原因に挙げられていた。このことから今まではお金にあまり困っていなかったものの、コロナ禍における経済的困窮により貧困状態に陥ってしまう家庭も少なくないと考えた。貧困には絶対的貧困と相対的貧困があ

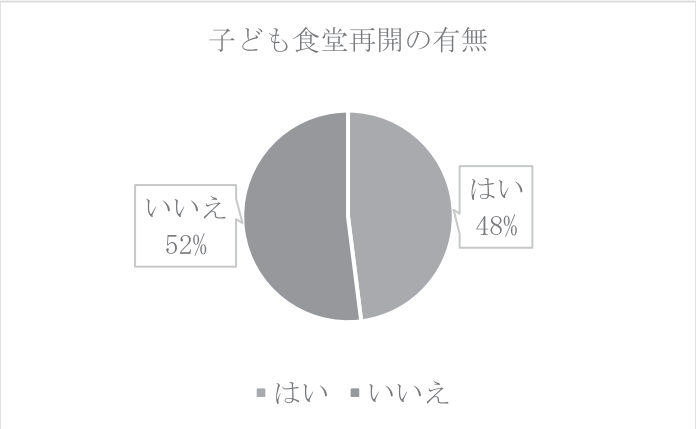
1）　朝日新聞，「夫婦とも在宅勤務で関係が悪化、もう限界…離婚できる？」，〈https://www.asahi.com/articles/ASN5P5F2BN4YUTIL00J.html〉，2021年10月26日

るが、むすびえ理事長の湯浅誠氏によると日本は相対的貧困が多いものの、その大半はあまり目を向けられず支援が不足している現状があるという[2)]。今までの日本においてもこういった問題が発生していたにもかかわらず、コロナ禍で新たな貧困層が増えたとなるとより大きな問題に発展してしまう。

コロナ禍でより増加した貧困の大きなサポートを担うのが子ども食堂である。子ども食堂は誰かがいるという安心感、居心地のいい空間、必要なものの支援といった様々な利点を持っており、この存在は地域の人にとってかけがえのないものとなっている。先述したようにコロナウイルス流行により活動休止をした子ども食堂も多いが、一方で活動を再開し、地域の人にとっての居場所を残している食堂も存在する。では愛知県内でどのくらいの子ども食堂が活動を再開しているのか。2020 年度に行った社会調査実習の結果を用い、次節でみていくこととする。

第 2 節　コロナ禍における活動再開の有無について

ここでは 2020 年度に行った社会調査実習の結果を基に、コロナウイルス流行後の子ども食堂再開の有無についてみていくこととする。2020 年度社会調査実習とは昨年成ゼミ 2・3 年生が合同で行った社会調査活動のことを指し、コロナ禍の子ども食堂の現状や運営者の思いを調査するべく、愛知県内の子ども食堂を対象にした調査である。今回はこの調査の結果を基にしてコロナ禍における活動再開の有無についてみていくこととする。



【図 1】2020 年 11 月時点での子ども食堂開催状況 N=81

ここでは、調査を開始した時期である 2020 年 11 月時点で子ども食堂は開催できているかどうかについて調査を行った質問を用いる。結果としては「はい（再開できている）」と答えた食堂は全体の 48%、「いいえ（再開できていない）」と答えた食堂は全体の 52%という結果となった（図 1）。これは調査をした愛知県内 81 カ所の子ども食堂のうち、約 40 カ所が活動を継続・再開しているということを表している。先ほども述べたが、コロナウイルスは社会全体を混乱させてしまうほど恐ろしいものだ。筆者はそのような状況下で調査をした約半数が活動を継続・再開しているという結果に衝撃を受けたと同時に、コロナ禍という厳しい状況の中でこれら約 40 カ所の子ども食堂はどのようにして活動を継続・再開すること

2）厚生労働省,「子ども食堂応援企画」,〈https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou_kouhou/kouhou_shuppan/magazine/202010_00002.html〉、2021 年 10 月 22 日

ができたのかという疑問が生まれた。次章から筆者が何度か参加させて頂いている名古屋市のほんわか食堂の活動を基に、子ども食堂の継続要因を考察していくこととする。

第２章　コロナ禍における活動形態の変化

第１節　コロナウイルス流行前後のほんわか食堂

ほんわか食堂は名古屋市南区（現在は港区）に存在し、病院の講堂や病院から少し離れた東築地防災センターを拠点に活動している。以下でコロナ禍前と現在のほんわか食堂について紹介する。

ほんわか食堂の運営は 2016 年 12 月に開始された。月 1 回の頻度で開催され、50 食から始まった食堂は、コロナ禍前には約 100 食と約 2 倍増加した。2017 年 8 月からは港区の東築地防災センターで「ほんわか食堂 in みなと」を年に 3 ～ 4 回開催するようにもなった。

「ほんわか食堂」の活動でも子ども達と話すことはできるが、時間が限られる中で深い話をするのは難しく、「今以上に 1 人 1 人の子ども達と深く話したい」という思いから 2017 年夏に「みのり塾（後に「あすなろ」)」という名の学習支援を開始した。参加人数は子ども達のみで 10 人ほどであり、ほんわか食堂と比べるとかなり小規模な活動だといえる。

現在はコロナウイルスの影響で「ほんわか食堂」は休止中であるが、生活に困っている人を対象にしたパントリーを子ども食堂と同じく月 1 回行っており、参加世帯は毎月約 80 世帯である。学習支援はコロナウイルスの影響で数ヶ月間休止していたものの、「再開して欲しい」という参加者の声が多く、2020 年 10 月に会場を変え再開。感染防止のため人数制限を行う必要があり、普段から気になっていた子を重点的に集めたため、平均して 8 人ほどとコロナ禍に比べて参加人数は少なくなったが、このような勉強もでき居場所ともなる場が再び提供されることは、参加者にとってコロナ禍を過ごしやすくする大きな一部分となるだろう。

【図 2】流しそうめんを楽しむ多くの子ども達（コロナウイルス流行前）

現在では全国に 6000 カ所以上（2021 年 12 月時点）運営され、一般の方の認知度も高い子ども食堂であるが[3]、ほんわか食堂は名古屋市初の子ども食堂ということもあり、立ち上

3）NPO 法人全国子ども食堂支援センターむすびえ，「地域みんなの子ども食堂　コロナ禍でも増え続け、6000 箇所を超える。」，〈https://musubie.org/news/4524/〉，2021 年 12 月 23 日

げ時「子ども食堂」の認知度は低く、地域の人からの「子ども食堂」に対する偏見が非常に大きいものであったという。例として、当初はコミュニティセンターでの運営を予定していたものの、参加者がご飯を食べるための安価な代金が営利目的の活動と分類分けされてしまい施設の利用を断られ続けたことや、「子ども食堂」に理解ある住民が地域の掲示板にほんわか食堂のチラシを貼ると数日後には剥がされてしまったこと等が挙げられる。そのような偏見に立ち向かい続け、先述したように松土さんが勤務する病院の講堂を拠点に2016年12月、ほんわか食堂の運営が開始した。運営当初は寄付などの資金もなかったため、病院の友の会で開催されるバザーの売り上げや病院内でカンパ袋を回してお金を集め食材購入の資金にしていたそう。このような地道な行動で、コロナ禍前には毎回100食以上提供する名古屋市の中でも大きく人気な子ども食堂となり、地域の子ども達の大切な居場所となった（図2）

順調にも思えたほんわか食堂であったが、2020年2月の活動を最後に子ども食堂は休止した。コロナウイルス感染者が日本でも発生し、ウイルス感染の危険性が高まったためだ。突然の休止に追い込まれたほんわか食堂であったが、コロナ禍で生活に苦しむ家庭を救いたいとの強い思いから翌月にはフードパントリーの活動を開始する。次節でパントリーを始めた経緯と対象者の変化、そして支援世帯の増加等を当時の松土さんの思いも含めながらみていく。

第2節　パントリーを始めた経緯と支援世帯の増加

先述したように、コロナウイルス流行によりほんわか食堂は2020年2月の活動をもって子ども食堂の活動を休止した。休止中、松土さんは今まで参加していた子ども達やその保護者といった地域の人が今どのように生活しているのか、ご飯は今まで通り食べられているのかなどの様々な心配があり、子ども食堂時の参加者名簿を使い、状況確認の電話を毎日行ったという。普段の活動では分からない家庭状況が電話で明らかになり、衝撃を受けた松土さんは、そういった家庭を少しでも救いたいという思いが生まれパントリーの開始を決めたそうだ。

ロータリークラブやボランティアの協力もあり、子ども食堂休止の翌月にあたる2020年3月に第1回のフードパントリーを開始する事ができたが、このパントリーは現在のパントリーとは大きな違いがあった。現在のパントリーではコロナウイルス流行前から生活・家庭状況に心配があった家庭やコロナウイルスが原因で生活が苦しくなってしまった人といった「生活に困っている家庭・人」に限定している。だが1回目のパントリーはそういった限定はなく、対象者は「地域の子ども達」であったという。そういった意味では1回目のパントリーは従来通りの子ども食堂のような存在であったといえ、参加した子ども達にとっては、自分達の居場所が今まで通り残っていると安心できる機会にもなったのではないだろうか。当日は用意した100人分の食材を全て配り終えることができ、大成功であったそうだ。

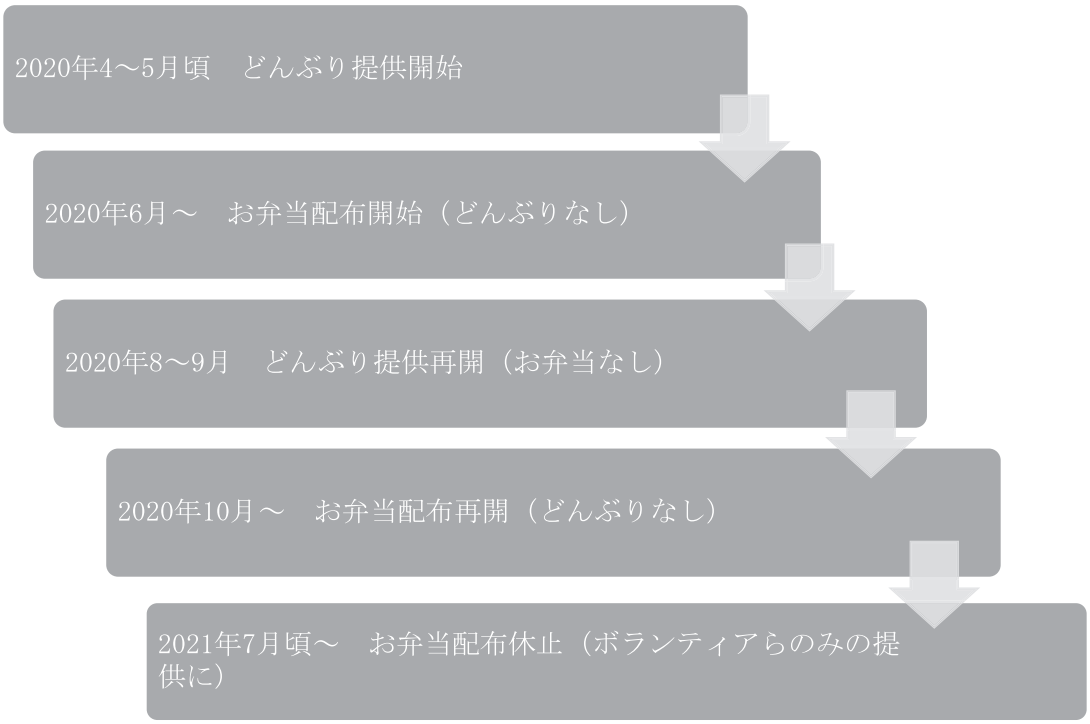
1回目の活動は大成功に終わったものの、松土さんの中で「こんな規模のパントリーをこれからも続けられるのか？」という疑問が生まれ、2回目からは生活に苦しむ家庭・人に限定した。2回目の開催は約20～30人程度だったものの、後に民生委員やスクールソーシャルワーカー、区役所、社協等からの紹介・お願いにより、現在では80世帯以上の家庭に向けた活動をしている。松土さんによるとこれらの団体はどれも分野が違うことから、紹介・お願いされる家庭もそれぞれ違うことが多く、多種多様な家庭への支援を可能にしているという。

筆者は今までに3カ所、計12回のパントリーに参加したことがあるが、その経験を基にパントリーを定義づけするならば、「必要な人に必要なものを配布し、生活を暮らしやすくするためのお手伝いをする活動」だ。特にほんわか食堂は生活に困っている人のみを対象に活動を行っているため、この定義は妥当なものであるといえるだろう。

ほんわか食堂のパントリーに参加していく中で、食材配布以外にお弁当やどんぶりの提供などといった活動形態の変化を感じていた。今回のインタビューで、そのような活動形態の変化を時期も含め明らかにすることができたため、図を取り入れながら次節でみていく。

第3節　コロナ禍における活動形態の変化

筆者は今まで、ほんわか食堂のフードパントリーには計7回参加したことがあるが、どんぶりの提供がある日、お弁当の配布がある日、提供そのものがない日など参加する時期によって活動形態が違うと感じることが度々あった。その中で、なぜほんわか食堂は活動形態を変化し続けるのかという疑問や、こういった活動形態の変化は本稿の目的である子ども食堂継続要因の解明に繋がるのではないかという考えから、コロナ禍におけるほんわか食堂の活動形態の変化を調査したいという思いが生まれた。実際にインタビューを行い、活動形態を変化させることでコロナウイルスに立ち向かい続ける姿が明らかになったため、以下で活動形態の変化を図にしてまとめ詳しくみていくこととする。



【図3】コロナ禍のほんわか食堂　活動形態の変化

コロナウイルス流行により2020年2月に子ども食堂を休止したものの、翌月に当たる3月にはパントリーへと活動内容を変更し、活動を再開したほんわか食堂であったが、「食材を配るだけではなく、美味しいご飯を作り提供したい」というスタッフの声や家具メーカーであるIKEAからの天ぷらの寄付を機に、2020年4～5月ごろ食材配布に加えてどんぶりの提供を始めた（図4）。

【図 4】実際に提供されていたどんぶり

当時どんぶりの提供は会場での提供のみであり、会場で食べられる人にとっては温かく美味しい食事を食べられるという利点があるものの、これでは会場で食事をする時間がない人やコロナウイルス感染を恐れる人、地域の人と顔を合わせたくない人などといった様々な理由で食べることができない人が発生してしまう問題もあった。ほんわか食堂スタッフの間で全員に提供できないのは不公平だという考えにまとまり、2020 年 6 月にどんぶりの提供を一旦休止し、お弁当配布を開始した（図 5）。配布は食材配布と同じように行われる。どんぶり提供ではなくお弁当配布にすることでパントリーに来てくれた全ての家庭に美味しいご飯を食べてもらうことができると考えたのだ。

【図 5】実際に提供されていたお弁当

だが、お弁当配布にすることで提供する数が格段と増え、子ども食堂やどんぶりの提供時と比べかなり大変であったという。例えば子ども食堂は子ども達だけで参加するケースが多かったためスタッフを含めても 140 ～ 150 食が最大であったものの、お弁当配布は 1 家族の人数分作るため 240 食以上作ることが多いそうだ。それでも松土さんは「親からすると子どもの分だけのお弁当をもらっても、自分の分や旦那さんの分は自分で作る必要があり、あま

り大きくは助からないはず。それならば家族の人数分お弁当を渡して、１つの食事だけでも楽にしてあげたい」と述べており、ただ配布をするだけではなく１軒１軒の家庭の事情を考えながら臨機応変に行動している姿が印象的であった。

こんなにも松土さんが家庭の事情や子ども達のことを考えるのはなぜか。筆者は、生活に困っている地域の人を手助けしたいという思いに加え、松土さん自身のお子さんの存在が大きいと考えた。なぜならインタビュー中、松土さんはお子さんとのエピソードを交えながら子ども食堂やパントリーの話をして下さったことが多くあったためだ。

【図６】活動中のお手伝いの様子
出典：https://www.meinan.or.jp/kodomo

例えば、現在ではコロナウイルス流行により休止しているが、普段のほんわか食堂では子ども用の包丁やまな板を使用し、子ども達に野菜や果物を切ってもらうお手伝いの時間がある（図６）。その時間が生まれた理由は松土さんのお子さんの存在が大きいという。お子さんの幼少期、包丁で手を痛めることを心配し料理のお手伝いの中で包丁を使う作業はあまり頼まなかったという松土さん。しかし実家に帰り、松土さんの親御さんが食品を切るための台を作り、切り方を丁寧に教えている姿や一生懸命に切るお子さんの姿を目の当たりにし、「子どもは野菜や果物を切ることは危ないが学びの一つになる」ということに気がついたそうだ。自分が作る子ども食堂では来てくれた子ども達に野菜や果物を切ってもらい、楽しんでもらうことに加え食べ物に興味を持ってもらおうという思いが生まれたのだという。

実際に筆者は子ども達と果物を切る役割を担当したことが何度かあるが、松土さんの言葉通り子ども達は果物を切る作業をとても楽しんでおり、自分が切った果物がお皿の上にのせられると嬉しそうに食べ、中にはおかわりをする子もいた。そういった経験もあり、小さい子に包丁を持たせることは不安ではあるものの、野菜や果物といった容易に切ることができるものは切ってもらい、食材に関心を持ってもらうことは重要なことであると松土さんの思いに共感した。子ども食堂の運営者に加えて１人の親でもある松土さん。親の目線で子ども達や家庭を守る姿勢が地域の人に愛される理由だと考える。先述したように現在はコロナウイルス感染防止により、こういったお手伝いの時間はないが、子ども食堂を再開することができた日にはこの時間も取り入れ、子ども達に楽しんでもらい食の関心を向上させる機会を再び設けることが必要であると考える。

【図 7】消費期限が書かれたお弁当

2020 年 6 月から順調にお弁当配布を続けていたものの、夏の食中毒発生の防止として 2020 年 8 ～ 9 月に一旦どんぶりの提供を再開。図 7 のようにお弁当には消費期限が書かれているものの、お留守番をしている子どもが期限切れのお弁当を食べてしまう可能性があるとの配慮からだという。そして気候が涼しくなった 2020 年 10 月にお弁当の配布を再開。2021 年 6 月頃まで配布を継続していたが、2021 年 7 月、真夏の食中毒の危険性やコロナウイルスの第 5 波到来によりお弁当配布は中止し、現在ではボランティアや職員の方のみに向けてお弁当を提供している。

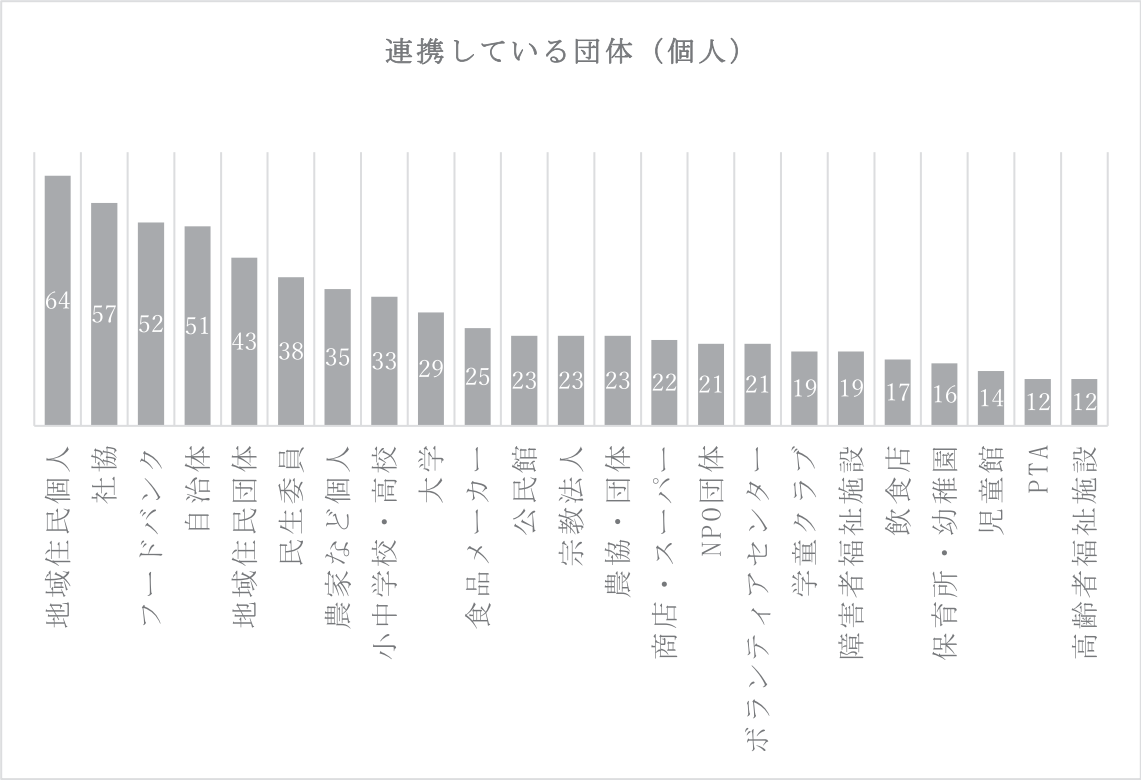
以上のように、どんぶり提供やお弁当配布などといった活動形態の変化は社会情勢や参加者への配慮などから生まれたものであるということが分かった。だが活動形態を変化させつつ運営を継続するには、多くのボランティアや職員の方、そして寄付をしてくれる企業等の存在が重要な役割を果たしているはずだ。次章で人とのつながりが子ども食堂運営にどのような役割を担っているのかをみていく。

第 3 章　企業や団体とのつながりの重要性

本章では子ども食堂の運営に必要不可欠であると考えられる人とのつながりについてみていく。人とのつながりという部分だけで見ると「子ども食堂は 1 人では作れない」という松土さんのお言葉から、コロナウイルス流行前から強いものであったと推測できる。今やコロナウイルスが流行し対面で会うことが難しくなってしまった世の中ではあるが、このような厳しい状況の中でも運営を継続・再開できた子ども食堂は、どのように人とつながり続け、どのような協力・支援を受け開催することができたのかという疑問が生まれた。ここでは過去の分析から分かった、愛知県内にある子ども食堂の人・団体の連携数や連携内容をまとめた後、インタビューで分かったほんわか食堂の人（団体）とのつながりの部分を詳しく見ていき、上記の疑問を解明していく。

第１節　多くの連携

本節では第１章同様、2020 年度に行った社会調査実習の結果を用いて人（団体）の連携数や連携内容をみていくこととする。

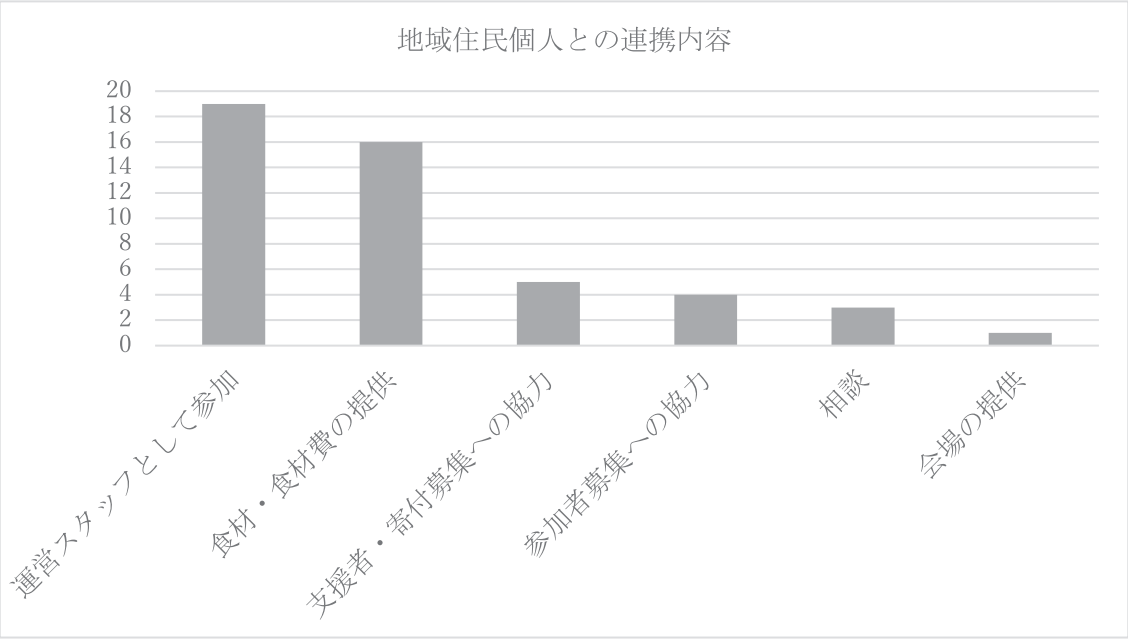


【図８】子ども食堂と連携している団体　N=81（複数回答）

まず愛知県内の子ども食堂におけるつながりの数についてみていく。つながりの対象ごとに分類分けをし、つながりを持っている子ども食堂が多い順に並べたのが図８である。最も多かったのは地域住民個人であり、これは今回調査した 81 団体の約 79％が地域住民個人と連携していることを表す。この割合により地域の居場所を意味する子ども食堂にとって、運営に地域住民個人がいかに重要な存在であるかが読み取れる。ここでの地域住民個人は地域ボランティアを表すが、筆者が今までに参加した子ども食堂のほぼ全てに地域ボランティアが参加していた印象であるため、この結果は妥当なものといえる。

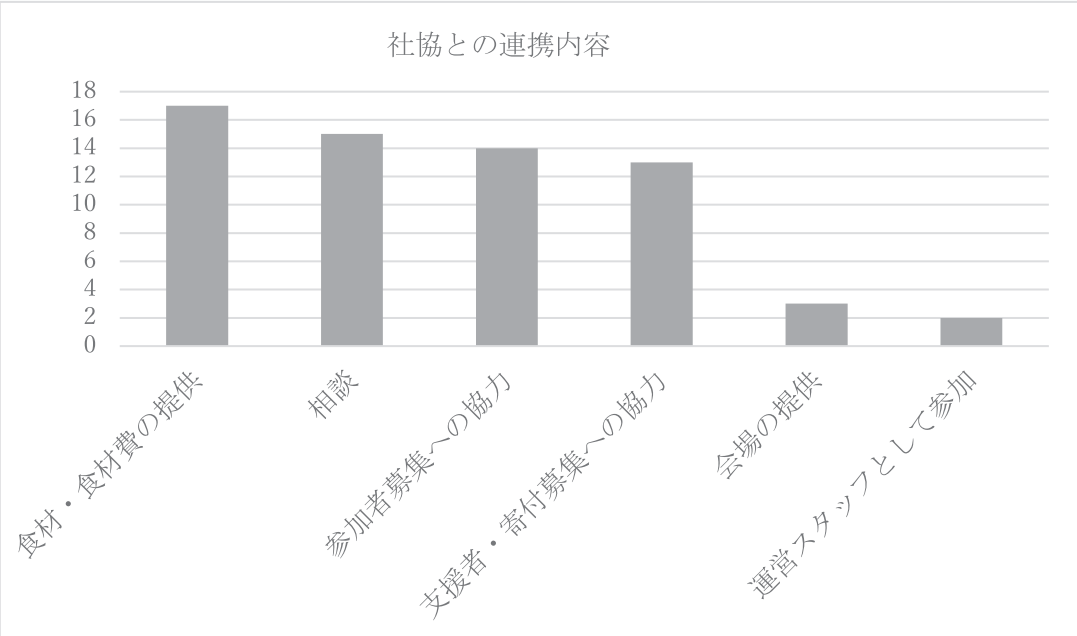
地域住民個人に次いで社協、フードバンク、自治体と続く。フードバンクは子ども食堂との連携が３番目に多いが、これはコロナウイルス流行後にフードパントリーでの活動が増えたことが大きな要因であると考える。今までの子ども食堂といえば、みんなで集まり会話しながらご飯を食べ、誰かと遊んで共に時間を楽しむという空間であり、そういった空間が大きな強みであった。しかしコロナウイルスが流行し、３密を回避しつつ困っている人の助けとなる活動はなにかと考えたときに多く選ばれたのがフードパントリーだったのだ。そういった経緯から多くの子ども食堂がフードパントリーという活動形態を選択し、フードバンクという団体からの支援を受けたのだと推測できる。そういった意味でも、この調査の結果はコロナ禍ならではといった見方もできるだろう。

次につながりの内容についてみていく。ここでは先ほどのグラフでつながりを持っている子ども食堂が多かった地域住民個人、社協、フードバンクの３つに焦点を当てていくこととする。



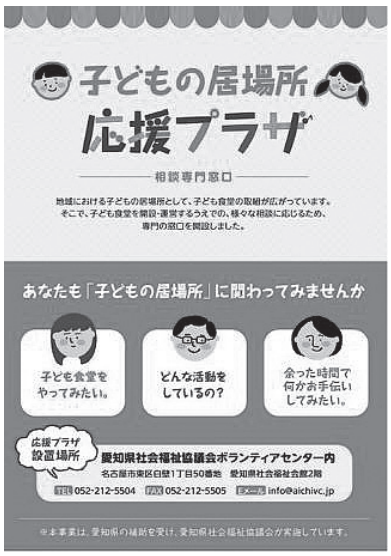
【図 9】地域住民個人との連携内容　N=64（複数回答）

まずは「地域住民個人と連携を持っている」と回答した 64 カ所の子ども食堂を対象に行った調査を基に、地域住民個人との連携内容についてみていく。結果としては多いものから、運営スタッフとして参加、食材・食材費の提供、支援者・寄付募集への協力、参加者募集への協力、相談、会場の提供となった（図 9）。上位 2 項目は他の項目と比べても抜きん出ており、地域住民個人での主な役割はこれらと仮定することができる。たしかに筆者の経験を振り返ると、企業等からの寄付で受け取った食材に加えて、地域ボランティアの方達が家で余った食材や畑で採れた野菜などを持ち寄ってメニューを決めている印象であったため、この結果は妥当なものであるといえる。



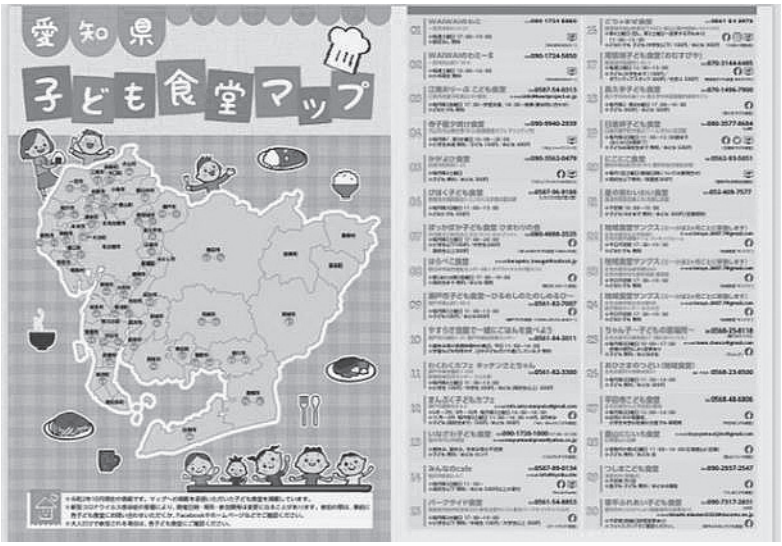
【図 10】社協との連携内容　N=57（複数回答）

次に「社協と連携を持っている」と回答した 57 カ所の子ども食堂を対象に行った調査を基に、社協との連携内容についてみていく。結果としては多いものから、食材・食材費の提供、相談、参加者募集への協力、支援者・寄付募集への協力、会場の提供、運営スタッフとして参加となった（図 10）。ここでは 2 番目に多かった相談、3 番目に多かった参加者募集への協力に焦点を当てて分析していく。



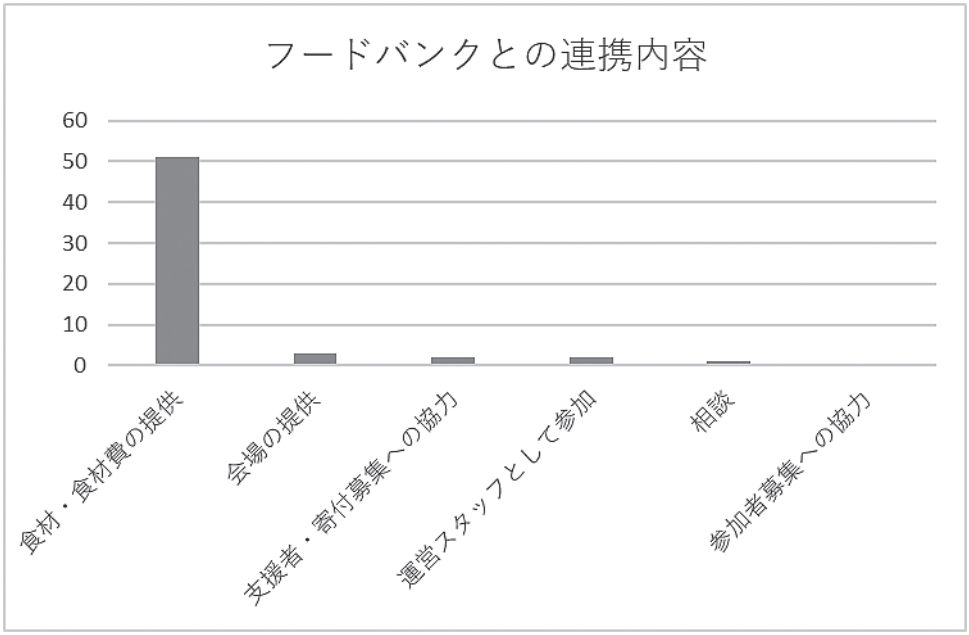
【図 11】子どもの居場所応援プラザのチラシ
出典：http://aichivc.jp/wp-content/uploads/4fb20d4fa756203c26ba79819755bc92

まずは相談についてみていこう。ここでは社協が運営している「子どもの居場所応援プラザ」という相談窓口について紹介していく。この相談窓口は 2019 年 7 月に開設された比較的新しい窓口であり、子ども食堂の始め方や開設費用のことなど、子ども食堂の運営者が抱く様々な疑問点の相談ができる。また、この相談窓口は運営者だけでなく、子ども食堂とはなにかを知りたい人や子ども食堂でボランティアをしたい人でも質問・相談を受け付けており、子ども食堂に関わる機会も与えているところが非常に画期的で興味深い点の一つである（図 11）。



【図 12】愛知県子ども食堂マップ
出典：http://aichivc.jp/wp-content/uploads/4fb20d4fa756203c26ba79819755bc92.pdf

次に参加者募集への協力についてみていく。ここでは愛知県子ども食堂マップを挙げる。このマップは愛知県の子ども食堂について紹介されているもので、子ども食堂の名称、住所、電話番号、開催日時や頻度、参加費に加えてそれぞれの子ども食堂が運用しているSNSといった連絡手段も掲載されており、子ども食堂に参加したい人が知りたい情報が一目で分かるように構成されている（図12）。マップの掲載に了承した子ども食堂のみとなるため、県にある全ての子ども食堂が掲載されているわけではないものの、現時点（2021年12月10日現在）では約140団体もの子ども食堂が掲載されており、現在約190カ所（2021年12月現在）あるといわれている愛知県内の子ども食堂の半数以上の情報をこのマップ一つで得ることができるといえる。筆者がいくつかの子ども食堂に参加した際、社協のHPからこのマップを見つけて子ども食堂が近所にあることを知り参加を決めたという学生も何人かいたため、このマップの周知は十分なものであるといえるだろう。



【図13】フードバンクとの連携内容　N=52（複数回答）

最後に「フードバンクと連携を持っている」と回答した52カ所の子ども食堂を対象に行った調査を基に、フードバンクとの連携内容についてみていく。結果としては食材・食材費の提供が圧倒的に多く、会場の提供、支援者･寄付募集への協力、運営スタッフとしての参加、相談、参加者募集への協力が順に続く（図13）。ここでフードバンクの定義をまとめておく。公益財団法人日本フードバンク連盟によると、『フードバンクとは企業などから寄贈された食品を、支援を必要とする人たちを支える福祉施設や団体に、無償で分配する事業』とある[4)]。こういった記述から、フードバンクと連携している子ども食堂の多くは食材支援を受けていると考えられ、今回の結果は妥当なものであるといえる。

以上のように、愛知県内の子ども食堂を対象にした2020年度社会調査実習の調査では地域住民個人、社協、フードバンクの順に連携数が多いという結果となった。だがこの調査はコロナウイルス流行後のみを対象にしたものであるため、流行前については読み取ることが

4）　公益財団法人日本フードバンク連盟,「フードバンク活動について」,〈https://foodbanking.or.jp/foodbank/〉, 2021年11月3日

できなかった。そこで子ども食堂開設当初、どのようにボランティアや企業と繋がったのか、またコロナ禍という厳しい状況の中でどのように関わりを継続させているのかといった疑問から人（団体・企業も含む）とのつながりの部分を深く調査したいという思いが生まれた。次節では第２章同様ほんわか食堂に焦点を当て、ボランティアや企業等といった人とのつながりをまとめていくこととする。

第２節　開設当初のほんわか食堂

ここでは開設当初のほんわか食堂がどのようにして参加者やボランティアを集め、関わりを持つことができたのかについてインタビューを基にまとめていく。

まず参加者との関わりについてみていく。子ども食堂の参加者としては地域の子どもやその保護者、そして高齢者が挙げられるが、当初は主な参加者である子ども達に目を向け、地域の子ども達への広報に力を入れたという。教頭先生にお願いし小学校の前でチラシを配布したところ、参加してくれた子が次回の開催では友達を何人か連れて参加してくれるというように、少しずつではあるがほんわか食堂という居場所の存在が知れ渡り、徐々に参加者が増えていったそうだ。

次にボランティアについてみていく。今までのほんわか食堂の参加を振り返ると、地域の子ども達の次に同世代の学生ボランティアの存在が大きい。今や参加しているのが当たり前ともいえる学生ボランティアであるが、当初はどのようにして集めたのだろか。

ほんわか食堂には中京大学・愛知大学ボランティアサークル・至学館大学・日本福祉大学などといった様々な大学がボランティアとして参加しているが、ここでは筆者の経験から毎月の参加率が高いと考えられる中京大学と愛知大学ボランティアサークルに焦点を当て見ていくこととする。

まず中京大学との関わりについてまとめていく。中京大学とは他の子ども食堂運営の方とあいち子ども食堂ネットワークという団体を立ち上げた際に、中京大学の成教授と出会ったことがはじまりだという。ここであいち子ども食堂ネットワークについて簡単に紹介していく。あいち子ども食堂ネットワークとは、子ども食堂運営者らの学習交流会を通じて子ども食堂の輪を広げる、学校・地域などへの広報や周知、学校・地域などとの連携や協同といった３つの目的から生まれたものであり、松土さんをはじめとした様々な子ども食堂の運営者や成教授といった子ども食堂をよく知っている人が集まってできた団体である。ネットワークに食材やお金の寄付があればメンバーでそれぞれ分け、定期的に学習会を開き意見交流の時間を作るなど、愛知県内の子ども食堂全体で助け合う姿勢が感じ取られる。人とつながり継続した活動が必要である子ども食堂にとって、この団体の存在は非常に心強く重要なものだ。松土さんは、このような重要な場で成教授と出会い、教授のゼミナールや授業をきっかけにボランティアに来る中京生も多く非常に助かっているとおっしゃっていた。

次に愛知大学ボランティアサークルとの関わりについてみていく。筆者は今までに10回以上ほんわか食堂に参加させていただいているが、必ずこのボランティアサークルの学生が参加しており、ほんわか食堂にとってかなり重要な存在であるといえる。そんな愛知大学の学生と関わりを持つようになった理由は、愛知大学のボランティアサークルから子ども食堂という場所について話して欲しいとお願いをされたことがきっかけだという。お願いを受けて実際に愛知大学へ講演に行き、その後ほんわか食堂は愛知大学の教授や学生と交流を持ち続けているそうだ。

以上のことから、ほんわか食堂では学生ボランティアとの交流を早い時期から持ち続けていることが分かった。松土さんはこの状況について、「本当にありがたい。子ども食堂やパントリーの運営が継続できているのは、学生ボランティアの協力があってのことだと思う。若い力から元気をもらうことも多いし、このまま続けて参加してもらえればと思っている。」とおっしゃっており、学生ボランティアの存在をありがたいものと思っていただいている様子であった。

参加者やボランティアに愛されるほんわか食堂であるが、コロナウイルス流行により世の中が大きく変わってしまった現在、どのような思いでどのような活動をしているのだろうか。次節でまとめていく。

【図 14】パントリー活動の様子（袋詰め）

【図 15】パントリー活動の様子（受け渡し）

第3節　コロナ禍のほんわか食堂

ここでは、コロナ禍という厳しい状況下でもほんわか食堂の運営を継続することができた理由について現在の活動も交えながらみていく

まずはほんわか食堂における現在の活動について紹介していく。現在ほんわか食堂ではコロナウイルスの影響で子ども食堂の活動は休止しているものの、フードパントリーという活動で様々な家庭を支えている。世の中の情報を定期的に発信している日刊ゲンダイは、フードパントリーという活動について「企業や個人で余剰となった食品を生活に困った人たちに供給する活動」と説明している[5)]。まさにほんわか食堂もこの説明通りの活動を2020年3月から開始している。流れとしては朝9時から食品の袋詰め作業を行い（図14)、10時半から14時頃までパントリーが開催され（図15)、14時から片付けと反省会が行われ解散といったものだ。筆者は今までに計7回ほんわか食堂のパントリーに参加しているが、どの活動日もこの流れは変わっていない。流れを大きく変えないことも参加者やボランティアにとって参加しやすい秘訣だと考える。

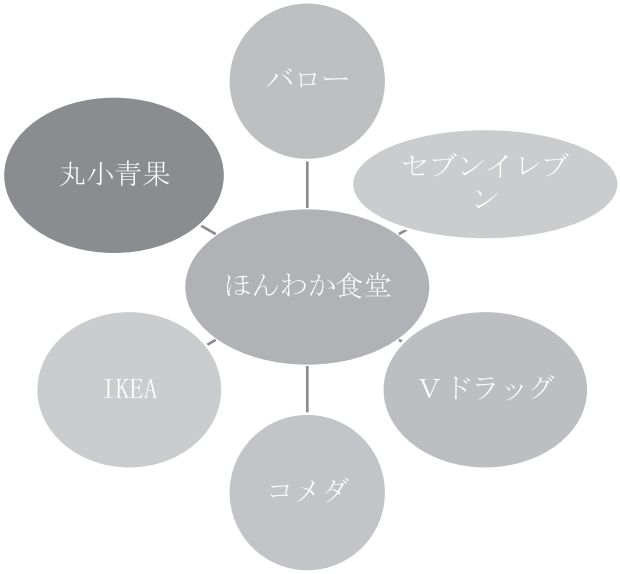
【図16】パントリーでの配布物①

【図17】パントリーでの配布物②

筆者がほんわか食堂のパントリーに参加して驚いたのは配布物の量と種類の多さだ。図16と図17は2021年11月18日の様子であるが、レトルトの食品やカップラーメンなどの食品に加えおもちゃや子供服、ベビー用品といった日用品もあることが分かる。コロナウイルス感染拡大防止のための制限をしていることもあり1人で来る参加者も多いが、1人では持ちきれないほど多くの食料品や日用品を配布していた。このように、1つの家庭に対して

5)　日刊ゲンダイ,「コロナ禍で活動拡大　困窮者を支えるフードパントリーとは」,〈https://www.nikkan-gendai.com//view/life/282891〉, 2021年11月5日

大量に配布ができることは参加者にとって生活面で非常に助かる活動であるだと予測できる。これらの配布物は個人や企業の方からの寄付が多いということだったが、ではどのようにして様々な人とつながりパントリーを運営しているのか。以下で松土さんに向けて行ったインタビューを基にまとめていく。



【図 18】ほんわか食堂と主な企業とのつながり

今回のインタビューでほんわか食堂は様々な業界の企業と関わりを持っていることが分かった。図 18 はその代表的な企業をまとめたものである。パントリー当日に配布される活動の詳細が書かれている紙には、寄付者の欄に直接企業の名前が書かれていることが多く、一見するとほんわか食堂と企業が直接関わりを持っているようにみえる。だが、松土さんによると一つの子ども食堂と一つの企業が直接関わりを持つことは非常に難しく、現実的ではないという。子ども食堂と企業のつながりが難しいのにもかかわらず、図 18 のように多くの企業と関わりを持つことができている理由はなにか。インタビューの中で、ほんわか食堂が企業と関わるために特に重要な団体であると感じた、フードバンク愛知とあいち子ども食堂ネットワークに焦点を当て見ていくこととする。

まずはフードバンク愛知との関わりについてみていく。フードバンク愛知とは、公式ホームページによると「企業と人を繋げる架け橋になりたいとの思いから NPO として立ち上がった食品ロス支援活動団体」とある[6)]。言い換えると、フードバンク愛知に集まった寄付を県内の子ども食堂などに配布し、間接的に生活が困っている人のお手伝いをしている団体だ。先述した一つの子ども食堂と一つの企業で関わりをもつことは難しいという点、そしてコロナ禍での普段の活動が難しくなりパントリーへと活動形態を変化させた子ども食堂が多いという点から、このフードバンク愛知と連携することで様々な企業と関わりを持つことができるきっかけとなり、多くの子ども食堂にとってこの団体の存在は非常に大きいものであると予想される。

6) フードバンク愛知、「フードバンク愛知について」, 〈https://www.aichi-children-dining-network.com/〉, 2021 年 10 月 23 日

ほんわか食堂もフードバンク愛知を通じて企業と関わりを持っている一つの子ども食堂であり、今後はこの団体とのつながりでドラッグストア（V ドラッグ）と関わりを持つことができる可能性があるそうだ。ドラッグストアは洗剤や消毒液などの消耗日用品を多数取り扱っている企業であるが、このような企業と継続して関わりを持つことができれば参加者の暮らしをより豊かなものにできると考えられる。

【図 19】日用品・衣服・お菓子コーナーで受け取るものを選ぶ親子

実際に 2021 年 10 月のパントリーでは消毒液などの日用品を配布したことがあったが（図 19)、希望者のみの配布であったのにも関わらず開始 1 時間～ 2 時間ほどで配布が終了した。これは消耗日用品が日常生活でいかに必要とされているのかを表しているといえる。今後ほんわか食堂がドラッグストアと関わりを持ち、こういった商品を今まで以上の数や種類を配布することができれば、より参加者の生活を支えることができる活動になるはずだ。できる限り今後の状況を見守っていきたい。

次にあいち子ども食堂ネットワークについてみていく。先述したように、あいち子ども食堂ネットワークとは松土さんをはじめとした様々な子ども食堂の運営者などが集まってできた団体であるが、松土さんのインタビューの中でこの団体の存在も大きいように感じた。ほんわか食堂には業務用の冷蔵庫があることから、松土さんはネットワークの中で企業から食品を受け取り保管するという事業部のような役割を担っているそう。食品受け取りでの時間で企業の方と話をすることもあり、そのような機会で企業との関わり合いを継続しているとのことであった。ここにもただ寄付を受けるだけではなく、しっかりと話をしてお礼をするという松土さんの人柄が現れており、こういった会話を居心地良く感じている企業も多いのだと予想できた。

以上のような理由でほんわか食堂が企業とつながりを持っていることが分かった。だが、そういった企業、そして参加者と継続した関わりを持つことなしには子ども食堂やパントリーの活動を続けることは難しいはずだ。今年 5 周年を迎えるほんわか食堂はどのようにして参加者や企業との関わりを継続しているのだろうか。次節でみていくこととする。

第 4 節　参加者や企業との継続した関わりの秘訣

第 3 節でほんわか食堂は今まで多くの人と出会い、今日まで活動を継続できているということが分かった。だが、コロナ禍という厳しい状況の中でどのようにして関わりを継続して

いるのだろうか。以下でほんわか食堂における継続した関わりの秘訣について参加者・企業の二つに分けてみていくこととする。

【図 20】LINE 未登録の参加者に登録のお願いをする学生ボランティア

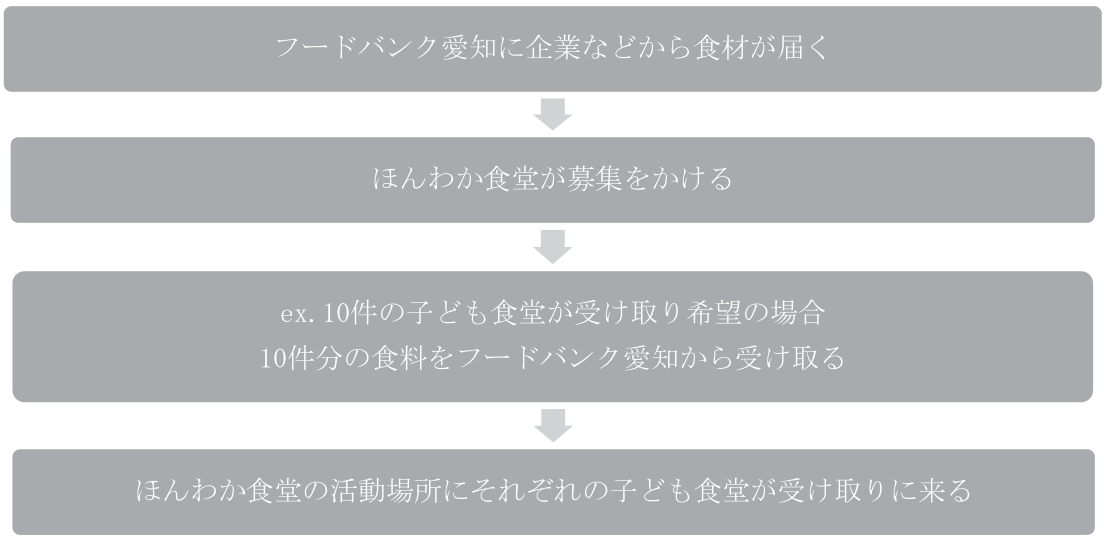
まず参加者との関わりの継続についてみていく。現在、毎回の活動で参加者にほんわか食堂公式 LINE の登録をお願いしており（図 20)、受付時の名簿から参加しているほぼ全ての方がこの LINE を登録していることが分かる。この LINE は、ほんわか食堂から登録者には定期的にパントリー開催などの告知が配信され、登録者からほんわか食堂には個別でやりとりができ、パントリーの予約もできるという特殊な形式だ。個別でやりとりができることから、個人的な相談を人目気にせず行うことができ、参加者にとっては非常に心強いものであると推測される。

筆者は、ほんわか食堂のパントリー予約制という仕組みや個人のやりとりができる LINE の「人目を気にしなくてもいい」という部分が非常に重要であると考えている。NPO 法人フードバンク山梨理事長の米山けい子氏は自身の著書で「日本には困窮していることを他人に知られたくないという恥の文化があり、多くの人が集まる場所で支援を受けることに抵抗がある人も少なくない」と述べており、日本の文化に合わせた支援を行うことが重要であることを示唆している [7)]。筆者もこの主張に同感しており、できるだけ人と人とが顔を合わせず支援を受けられる形を世の中が推奨すれば、今以上に多くの方が生活しやすい環境を作りあげることができるはずであると考えている。今までにほんわか食堂含め 3 カ所のパントリーに参加した経験があるが、ほんわか食堂以外の子ども食堂はどちらも予約制ではなく地域全員参加のものであった。たしかに地域全員参加にすることで差別のないパントリーを作り上げることができるが、どうしても支援を受けることが恥だと考えてしまう人は参加を拒んでしまう可能性があり、本当に支援が必要な人に必要なものを届ける事はできないのではないかと考えた。支援が必要な人に必要なものを届けるため、そして日本の恥の文化に合った支援をするためにも、ほんわか食堂の予約制で予約時も参加者同士が顔を見合わせないようなパントリーは守っていくべき活動だ。

次に企業との関わりの継続について見ていく。先述したように一つの子ども食堂と一つの企業が直接関わりを持つのは現実的ではないものの、パントリーの運営を継続させるために

7） 米山けい子，2018,「からっぽの冷蔵庫　見えない子どもの貧困」，p 66

は企業からの寄付が不可欠である。そのためほんわか食堂では、フードバンク愛知やあいち子ども食堂ネットワークを通して企業から様々な寄付を受けている。ネットワークでは事業部として活動しているため企業の方との関わりを持てることを同章第3節で述べたが、フードバンク愛知を通して企業と関わりを持つために行っていることが大きく1つあるという。以下で詳しくまとめていく。



【図21】フードバンク愛知のほんわか食堂を通した配布の流れ

図21はフードバンク愛知のほんわか食堂を通した配布の流れを表している。フードバンク愛知に企業などから大量に食料が届いた際、ほんわか食堂を通じて様々な子ども食堂が食材を受け取る。具体的にはフードバンク愛知に大量に食料が届くと、ほんわか食堂がその食料を自身の活動場所に受け取りに来られる子ども食堂の募集をかける。例えば、ほんわか食堂での受け取りを希望する子ども食堂が10件であるとすると、ほんわか食堂は自分たちの分に加えてその10件分の食料をフードバンク愛知から受け取る。そして事前に決められた場所や時間にそれぞれの子ども食堂が受け取りに来るといった流れだ。

図22のようにほんわか食堂が間に入るようになったのは、それぞれの子ども食堂が直接フードバンク愛知に取りに行くことは、場所・時間・コロナ禍による密集など様々な問題が発生してしまうためだそう。フードバンク愛知から希望する子ども食堂に配布することができれば、フードバンク愛知との関わりをより密接なものにすることができ理想的ではあるものの、ほんわか食堂での受け取りは他の子ども食堂の方と直接話せる機会も設けることができ、直接の話し合いが難しいこのご時世に合っている方法だと考えた。

加えて、このようにフードバンク愛知の活動の協力をすることでフードバンク愛知からの信頼も得ることができると考えた。信頼を得ることができれば必要な食料を希望しやすくなるはずであり、これは後に参加者の方への配布をより豊かなものにできるということに繋がる。この協力にも助け合いの精神が現れていると感じた。

以上のように、ほんわか食堂では様々な方面の人とのつながりが子ども食堂の運営に重要な役割を担っていることが分かった。では本稿の目的である子ども食堂の継続要因はどのように定義することができるのだろうか。ほんわか食堂松土さんのインタビューを基に、第4章で考察していくこととする。

第４章　子ども食堂の継続要因とは

第２章と第３章でほんわか食堂の活動形態の変化や人とのつながりについて詳しくみてきた。これらを基に、本章では本稿の目的である子ども食堂の継続要因を解明していくこととする。

第２章ではコロナ禍におけるほんわか食堂の活動形態の変化についてみてきた。社会情勢や参加者の気持ちを考慮しながら活動形態を変化させている姿が印象的であったが、こういった、自分達だけではなく地域の人々を考慮する行動が子ども食堂の継続要因の大きな１つではないかと考えた。この行動は参加者だけではなく、ほんわか食堂という場所の存在を知ってはいるが参加はしていないというような地域の方にとっても悪く映らないはずと考えたためだ。例えば、ほんわか食堂が人数制限なしのパントリーや一部の人のみの食事の提供などといった社会情勢や参加者への配慮を全く行わない活動を続けるとする。その活動でも助かる人は少なからず存在するものの､参加者全員が平等に支援を受けることは難しくなり、人数制限なしなどのコロナ禍を軽視した活動を行い続けることでほんわか食堂の活動自体に不信感を抱く地域の方も出てきてしまうはずだ。このような状況になれば活動自体の反対の声も多く上がってしまい、子ども食堂の活動を休止、最悪の場合は終了となってしまう可能性も低くないはずだ。このような理由から、参加者の人数制限や予約制での参加者同士の顔合わせがあまりない状況、そして全ての参加者を対象としたお弁当の配布といった社会情勢や参加者の気持ちに配慮したほんわか食堂の活動は参加者の方だけではなく地域の人にも愛され、継続することができているのではないかと考えた。この考えから子ども食堂の継続要因の一つは、自分達ではなく地域の人々を第一優先に行動する活動だと定義する。

次に、第３章を基に子ども食堂の継続要因について定義していく。第３章では企業や団体等とのつながりを題材にし、参加者・ボランティア・企業に焦点を当てほんわか食堂はどのようなつながりを持っているのかについてみてきた。ここではまず、それぞれの「人」とどのように継続したつながりを保っているのかについて考察していく。

まず参加者やボランティアが継続して参加する理由だが、筆者の経験やインタビューの内容からやはり松土さんをはじめとしたほんわか食堂全体の雰囲気の良さが大きいと考える。筆者は今まで６カ所の子ども食堂に参加した経験があるが、他の子ども食堂と比べてほんわか食堂は温かく優しい雰囲気で溢れている。他の子ども食堂も優しく居心地が良かったものの、ほんわか食堂は学生ボランティアというより１人の学生として接して下さる方ばかりであり、ただ指示をして下さるだけではなく、学校やアルバイト、趣味、サークルなど普段のことを何気なく聞いて下さる方が多い。当時ボランティア経験がなく子ども食堂に参加すること自体消極的であった筆者にとって、心から居心地が良いと初めて感じたのがほんわか食堂であり、ほんわか食堂に通い続けようと決めたきっかけでもあった。他の学生ボランティアも、はじめのうちは授業やサークルがきっかけで参加する学生も多いが、授業が終わっても参加を続けている学生やわざわざ予定を空けて参加している学生も少なくない。これは学生ボランティアにとってほんわか食堂での参加が居心地良く、楽しいと心から思っていることの表れであると考える。

企業に関しても同じような事がいえると考えている。ほんわか食堂はあいち子ども食堂ネットワークの役員就任やフードバンク愛知の活動協力など様々なことを行っているが、この就任や協力のおかげでそれぞれの団体と密接な関係を築くことができ、この関係は後に

様々な企業と関わりを持つことができるきっかけにも繋がる。このように自分達にできることを確実に行うというほんわか食堂の真面目な姿勢が、地域の方だけでなく、フードバンク愛知などの団体や団体を通じた企業に認められ、支援をしたいと思ってもらえるのではないかと考えた。

以上のことから、企業や団体等とのつながりの部分からみた子ども食堂の継続要因は、子ども食堂運営者達が作り上げる居心地の良い雰囲気と運営者の真面目な姿勢の存在と定義する。

以上をまとめると、子ども食堂の継続要因とは、地域の人を第一に考え行動し、温かく優しい思いやりを持ち続け、どんな状況になろうとも諦めず行動し続ける姿勢であると考察する。加えて、行政や社会福祉協議会などといった公の団体との連携も子ども食堂継続に重要な役割を担っていると考える。本稿と同じく子ども食堂の継続要因について考察した北海学園大学の菅原浩信教授も、子ども食堂の継続要因の一つとして「行政からの支援を受けていること」「社会福祉協議会からの支援を受けていること」を挙げており、参加者やボランティアの参加を募るためにも、公の団体に活動の協力（子ども食堂の情報発信など）をしてもらうことが重要であることが分かる[8)]。先述したように、愛知県社会福祉協議会ではあいち子ども食堂マップを作成し子ども食堂の情報発信を積極的に行っており、愛知県もそのマップを自身のホームページで紹介するなど県と社協の連携も見受けられる。こういった連携を継続することで、子ども食堂への参加を広めることができ、活動がより活気づけることができるだろう。

ある講義での松土さんの言葉のように、たしかに子ども食堂は１人で作ることは難しい。参加者・ボランティア・企業などといった様々な人（団体）の存在が不可欠であり、それらの存在がなければ運営は難しいだろう。だが、誰かの助けを継続的に受け続け運営を保っていくためには、支援をする人にとって「この食堂の力になりたい」と思ってもらうことが非常に重要である。そのためには、子ども食堂を守りたい、地域の方を安心させたいという気持ちをもって行動し続けることが、何よりも子ども食堂の大きな継続要因であると考える。

終章　これからの子ども食堂

本稿ではなぜコロナ禍であっても活動を継続している子ども食堂が存在しているのかという問いを解明すべく、ほんわか食堂のコロナ禍における活動形態の変化や人とのつながりを基に子ども食堂の継続要因について考察した。今回筆者は子ども食堂の継続要因として、「地域の人を第一に考え行動し、温かく優しい思いやりを持ち続け、どんな状況になろうとも諦めず行動し続ける姿勢」と定義し、そういった姿勢があるからこそ応援したいと思うボランティアや企業が多く存在しており、子ども食堂を継続できると考察した。だが、子ども食堂の継続要因の考察は当事者の経験・思いによって大きく変わるものであると考えられる。本稿では学生ボランティアや運営の方それぞれが考える子ども食堂の継続要因については調査することができなかったため、今後の課題としていきたい。

子ども食堂自体の課題としては、今後いかに子ども食堂とパントリーの活動を両立させていくかという部分であると考える。子ども食堂が活動を大きく変える原因となったコロナウ

8）　菅原浩信，2020,「北海道の子ども食堂における継続要因」，ｐ 3-8

イルスは現在収束に向かっている。今後、コロナウイルスが完全に収束すると仮定すると、現在パントリーを行っている子ども食堂の多くは子ども食堂の運営を再開すると考えられる。筆者自身、パントリーはあくまで子ども食堂の代わりであり、子ども食堂を再開する際にはパントリーの活動は終了していくものだと考えていた。しかし先日の松土さんのインタビューの中で、「パントリーは別の問題であり、たとえ子ども食堂を再開することができたとしても困っている人が居る限りはパントリーの活動を継続していく必要がある」ということを学んだ。筆者は今までに子ども食堂とパントリーの両方の活動に参加した経験があるが、たしかに両者には違いがいくつかあった。違いとは、参加者の年齢層の違い、活動内容、参加者１人当たりの滞在時間などが挙げられる。こういった違いが存在しているということはそれぞれの活動にそれぞれの意味があり、活動によって必要としている人も違うはずだ。松土さんの言葉から、子ども食堂とパントリーを継続することができればより多くの人のお手伝いができるということを学ぶことができた。

だが同時に、子ども食堂とパントリーを両立し、多くの人の暮らしを支えることは理想的ではあるものの、現実的ではないことを感じた。子ども食堂は準備、調理、片付けなどといった作業を行い、１日の活動を終えればそれで終了とすることができるものの、パントリーは食材を集めることから始まり、仕分け作業、賞味期限の確認・分類、袋詰めなどといった準備の作業が不可欠だ。この二つの活動を同時並行していくのは想像以上の労力と時間と人手が必要になると予想される。両立させることは現実的ではないものの、パントリーを利用し続けたいという人は世の中に多く存在する。そういった人を救いつつ、運営者の負担にならないためにはどうすればいいのだろうか。

筆者は近隣の子ども食堂と協力し合うことが重要であると考える。子ども食堂とパントリーをそれぞれ交互に行うことで様々な方面の居場所づくりが可能となり、運営者にとっても負担を軽減させることができるのではないか。例えば、ある地域に子ども食堂Ａと子ども食堂Ｂがあるとすると、ある月はＡでは子ども食堂、Ｂではパントリーを行い、次の月はＡではパントリー、Ｂでは子ども食堂をするといった流れだ。地域の子ども食堂が協力し合うためには開催の頻度を合わせる必要があるものの、一つの子ども食堂で毎月２つの活動を両立することに比べ、運営者の労力と時間は軽減され参加者にとっての居場所を増やすことができるはずである。貧困を知られたくないという日本特有の文化にあった活動をするために予約制という形を主流にすることができれば、参加者にとって参加しやすい子ども食堂を増やすことにもつながり、今まで以上の活動ができると考える。

筆者は今までに多くの子ども食堂に参加してきたが、今回のように子ども食堂の継続要因について深く考えたことはなかった。だが今回松土さんへのインタビューを通し、考えたことで、運営の方の想像以上の苦労と行動力を目の当たりにしたと共に、「誰かを助けたい」という素直な気持ちが大きな原動力になっていると感じた。筆者自身、今後なんらかの困難に突き当たってしまったとしても、今回学んだ運営者の方が持つ「目標に向ける熱い思い」を忘れず、諦めずに行動し続けていきたい。

【参考文献】

朝日新聞,「夫婦とも在宅勤務で関係が悪化、もう限界…離婚できる？」,〈https://www.asahi.com/articles/ASN5P5F2BN4YUTIL00J.html〉, 2021 年 10 月 26 日

NPO 法人全国子ども食堂支援センターむすびえ,「地域みんなの子ども食堂　コロナ禍でも増え続け、6000 箇所を超える。」,〈https://musubie.org/news/4524/〉, 2021 年 12 月 23 日
公益財団法人日本フードバンク連盟,「フードバンク活動について」,〈https://foodbanking.or.jp/foodbank/〉, 2021 年 11 月 3 日
厚生労働省,「子ども食堂応援企画」,〈https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou_kouhou/kouhou_shuppan/magazine/202010_00002.html〉、2021 年 10 月 22 日
社会福祉協議会,「子どもの居場所応援プラザ」,〈http://aichivc.jp/wp-content/uploads/4fb20d4fa756203c26ba79819755bc92〉, 2021 年 11 月 5 日
菅原浩信, 2020,「北海道の子ども食堂における継続要因」, p 3-8
フードバンク愛知、「フードバンク愛知について」,〈https://www.aichi-children-dining-network.com/〉, 2021 年 10 月 23 日
日刊ゲンダイ,「コロナ禍で活動拡大　困窮者を支えるフードパントリーとは」,〈https://www.nikkan-gendai.com//view/life/282891〉, 2021 年 11 月 5 日
米山けい子, 2018,「からっぽの冷蔵庫　見えない子どもの貧困」, p 66

【謝辞】

本稿を作成するにあたり、ほんわか食堂松土さんへのインタビューを重要な軸とさせていただきました。いつも丁寧にお話を聴かせていただきました松土さんには心より感謝申し上げます。松土さんを含め、ほんわか食堂は毎回優しく楽しいお話をして下さる方ばかりで非常に居心地が良く、筆者自身もほんわか食堂が一つの居場所になっていると感じました。約 2 年半、大変お世話になりました。そして、研究の着想から構成、論文の執筆まで多くのご指導をいただきました成教授をはじめとした成ゼミみんな、約 3 年間大変お世話になりました。深く感謝いたします。